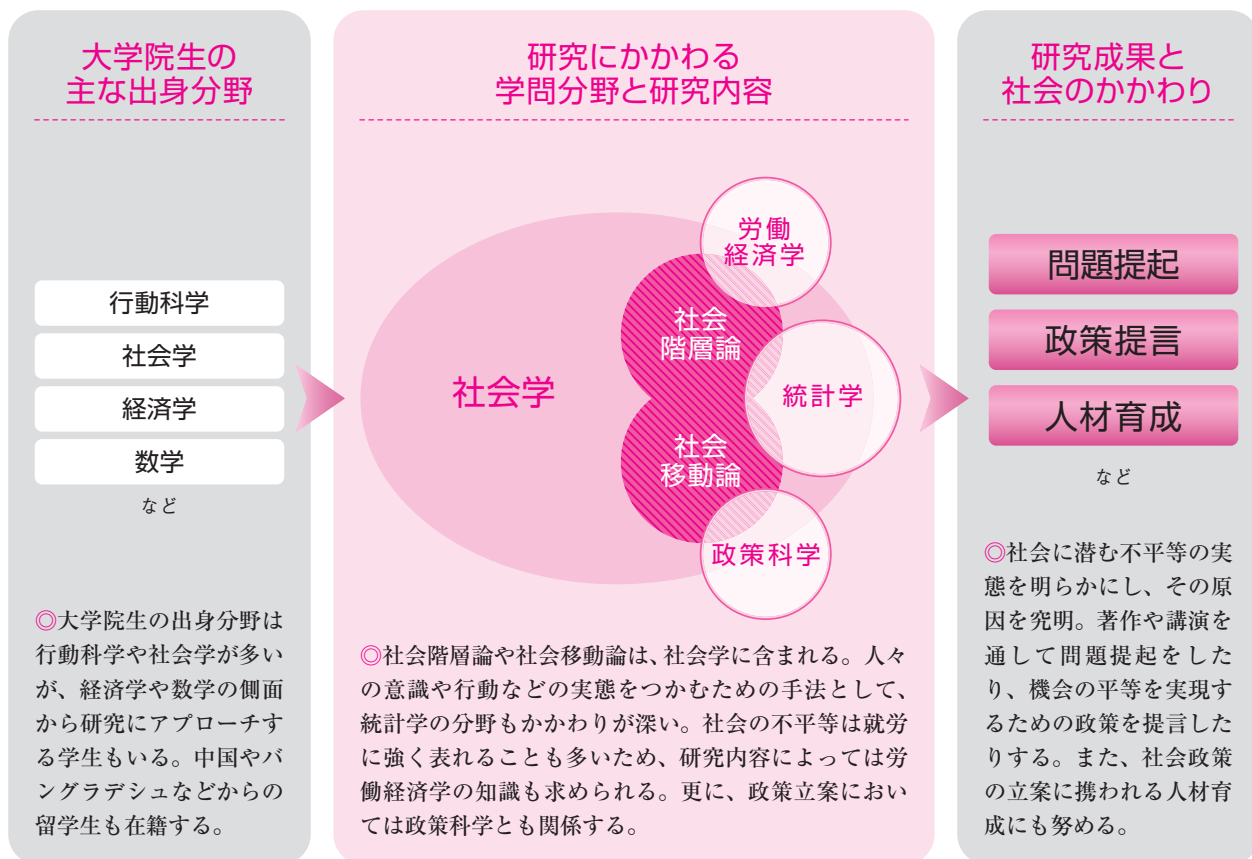


「不平等」の要因を解明し 皆が平等に暮らせる社会を目指す

東北大大学院 文学研究科 行動科学研究室

社会には、1人の力では解決することが出来ないさまざまな「不平等」が存在する。社会階層論・社会移動論は、社会の階層構造を解明し、その中に潜む不平等をなくすための政策を提言する学問だ。数ある研究テーマの中で、現代の日本における大きな社会問題である正規雇用・非正規雇用の格差問題を中心に研究し、グローバルCOE「社会階層と不平等教育研究拠点」拠点リーダーを務める佐藤嘉倫教授に、全ての人が平等に暮らせる社会の展望を聞いた。

フローチャートで分かる行動科学研究室



目の前の「不平等」に気付くことから始まる

社会階層論・社会移動論が求める学生像

発想や思考を柔軟に切り替える力

社会や人間に対する好奇心や探究心

問題を追究する集中力と継続力

私たちの研究対象は、今、私たちが生きている社会やそこで生活している人々です。それゆえに対象化が難しく、ある不平等があったとしても、「当たり前のこと」として見過ごしてしまいがちです。しかし、例えば「外国や日本の過去と比べてどうなのだろうか」などと発想を切り替えて見ることが出来ると、今の社会の問題点が浮かび上がってきます。

研究テーマは、「なぜだろう」といった小さな疑問が出発点になります。そのため、社会や人間に対する強い好奇心を持つ人が、この分野の研究者に向いていると言えます。

1つのテーマの研究に長期間取り組むこともよくありますから、集中力や継続力も大切な資質です。根気強さも必要でしょう。地道な調査を続けていると、途中でくじけそうになることもあります。研究の原動力になるのは、何よりも目の前の謎を追究したいという探究心なのです。

高校生へのメッセージ 高校時代から論理的思考力とコミュニケーション能力を磨いておく、将来、とても役立つでしょう。数学の証明問題などは「何の役に立つのだろうか」という疑問を持つ人もいるかもしれませんが、仮定から結論へと論理的に導く訓練をしておくことで、相手に筋道を立てて説明できるようになります。また、仕事は人とかわりながら進めるものですから、コミュニケーション能力も大切です。日本語はもちろん、英語でのコミュニケーション能力も意識して学習すると良いと思います。



佐藤嘉倫 教授

さとう よしみち 東北大学院文学研究科教授。グローバルCOE「社会階層と不平等教育研究拠点」拠点リーダー。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。横浜市立大商学部助教、シカゴ大学社会学部・コーネル大学社会学部客員研究員を経て、現職。専門は社会階層論、合理的選択理論など。主な著書に「ゲーム理論 人間と社会の複雑な関係を解く」(新曜社)などがある。

研究のきっかけ 貧富の差を 目の当たりにし 社会構造に関心

私は東京の下町に生まれ育ちました。周辺には町工場や商店などを営む家庭が多くあり、比較的貧しい地域でした。子どもの頃からそうした環境で育ちましたので、社会の状況や構造に何も疑問を持たずに、中学・高校時代を過ごしました。ところが、大学に入って出身地がさまざまな同級生と接しているうちに、自分が思う以上に日本は貧富の差が大きいことを知りました。キャンパスの近くの高級住宅街を初めて歩いた時も、「ここが本当に同じ日本なのか！」と驚いたものです。

大学では数学を学ぶつもりでしたが、入学後、数学が本当に得意な同級生を見ているうちに、自分には数学の才能がないと感じるようになりました。その一方で、貧富の差の存在を目の当たりにし、社会の不平等を実感した経験から、次第に日本社会のあり方について関心が高まってきました。幸い、3年生で理科系から文科系の学部に進学できる制度

研究概要

非正規雇用者が 受ける不利益を 拭い去るために

があったため、思い切って文転し、本格的に社会学を学び始めたのです。私が専攻したのは、社会学の中でも社会階層論、社会移動論と呼ばれる分野です。社会階層論では、世の中がどのような階層で成り立っているのかを研究します。例えば、資本主義社会には、資本家と労働者、ホワイトカラーとブルーカラー、高所得者と低所得者などの区分があります。社会移動論は社会階層論と密接した分野で、階層間の移動の状況を研究します。例えば、ある階層の親を持つ子どもが別の階層に移動できるのか、出来る場合はどのようなケースなのかなどを研究します。

社会階層論・社会移動論で使われる代表的な研究方法は、サンプリング調査です。日本全国から無作為に調査対象者を抽出し、調査員が職業や年収、学歴、親の職業などを質問します。そうして数千人のデータを集めて統計分析を行い、研究結果としてまとめていきます。

現在、私が特に関心を持って取り組んでいるテーマは、正規雇用・非正規雇用の問題です。学校を卒業して初めて就いた職業が正規雇用か非正規雇用かによって、収入や雇用の安定性、社会保障、福利厚生などに大きな格差があり、その後の生活や人生に大きな影響が出てきます。更に、いったん非正規で雇用されると、なかなか正規雇用に移れないこともよく知られています。それらは、私たちの調査結果によっても裏付けられています。

ここで1つの疑問が生じます。なぜ、正規雇用者と非正規雇用者にはそれほど差があるのか。これは、決して「当たり前」のことではありません。諸外国と比べると、非正規雇用者の賃金は、日本では正規雇用者の5割程度ですが、オランダでは8割を上回ります。他のヨーロッパの国々でも、日本のような低水準にある国は見当たりません。日本と諸外国とで違いが生じるのはなぜなのか。その原因を究明するのが私たちの研究です。

これまでの研究で分かってきたことは、非正規雇用者が現実と制度の

狭間に落ちてしまっているという現状です。日本では、高度経済成長、更にはバブル経済の頃までは、各種の社会制度は正規雇用者を対象として整えられてきました。経済情勢が変化して非正規雇用者が増えてきたにもかかわらず、それらの制度は基本的には変わっていないため、さまざまな不利益が非正規雇用の人々にもたらされているのです。

研究の展望

日本の社会に命をかけるのが使命 機会の平等を実現する

研究の面白さ

の1つは、謎を解明するプロセスにあります。

例えば、正規雇用・非正規雇用の問題であれば、非正規雇用

者の収入が低い理由について、「学歴が低く、職務経験も積んでいない傾向があるからだ」と説明されることがあります。しかし、日本とオランダの非正規雇用者の間に、学歴や学歴などの面で大きな差があるとは思えません。そこには別の要因があるはずで、それが何であるかを研究によって明らかにし、社会に対して問題提起や政策提言を行うのです。

私たちが目指しているのは不平等を拭い去ることですが、不平等には2つの側面があります。

職業によって収入に差があるのは、「結果の不平等」です。これがあまりに広がると社会は不安定になりますが、完全に平等であると、誰も頑張ろうという気持ちが起こりません。ある程度、結果の不平等があることが社会的には望ましいと考えられています。

一方、現代の日本には、例えば、医者になりたい場合、保護者が医者である方が有利という現状があります。背景には収入、教育、文化などさまざまな要因がありますが、出身階層によって挑戦する機会が制限されているとすれば、それは「機会の不平等」と言えます。正規雇用・非正規雇用の問題も、この機会の不平等が1つの原因となって生じている可能性があります。

平等な社会をつくり上げるために、機会の不平等があることは望ましくありません。社会階層論・社会移動論の最大の使命は、機会の平等を実現する、その一言に尽きるところです。

用語解説

1 ホワイトカラーとブルーカラー

ホワイトカラーは、一般に頭脳労働の従事者を指す。白いワイシャツを着用して仕事をする職種が多いため、こう呼ばれるようになった。一方、ブルーカラーは作業員など、主に肉体労働の従事者を指す。作業服の色に青系が多いため、こう呼ばれるようになった。

2 正規雇用・非正規雇用

一般に、フルタイムで従業員期間を定めない雇用形態を正規雇用という。一方、契約社員や派遣社員、アルバイト、パートタイマーなど、従業員期間や就業時間が定められている雇用形態を非正規雇用という。近年、非正規雇用の割合が増えているが、収入が少ない、雇用が不安定、キャリアアップの機会に乏しい、福利厚生が不十分などの課題が指摘されている。

3 高度経済成長

経済が飛躍的に成長することを指す。日本では、1950年代半ばから1970年代半ばにかけて高度経済成長を迎えた。

4 バブル経済

実態経済の経済成長を超えて、株式や不動産の価値が高騰する経済状態を指す。日本経済は、1986年から1991年までバブル景気を経験。

5 DV

ドメスティック・バイオレンス (domestic violence) の略称。家庭内暴力の意味。

離婚が子どもにもたらすさまざまな影響を研究

余田翔平さん

よだ・しょうへい 東北大学大学院文学研究科行動科学研究室博士後期課程3年。神奈川県・私立サレジオ学院中学・高校卒業



Q なぜこの分野に進んだのですか

A 高校時代は将来の道が定まらず、正直に言って何となく

東京都立大（現首都大東京）に進みました。当時は2年生進級時に学科を決める制度だったため、1年生で幅広い科目を学び、自分に向いているような学問を探しました。その中で興味を持ったのが社会福祉学です。児童虐待やDVといった問題の現状に衝撃を受け、もっと勉強してみたいという気持ちで社会福祉学科に進

みました。

卒論は、親の離婚が子どもの発達や人生にどのような影響を与えるかをテーマにしました。卒業後に就職するかどうか迷いましたが、このテーマをもっと掘りたいと考え、大学院に進むことにしました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 現在、3つの研究を同時進行させていますが、グローバルCOEとして研究しているテーマは、卒論と同じ、親の離婚が子どもに与える影響についてです。

子どもにとって、親の離婚はコントロールが出来ないことであり、発達やライフコースなど、人生に少なからず影響を及ぼします。これまでのさまざまな研究により、例えば、学歴や就職の面で不利になりやすいことが分かっています。親が1人になるために家計が苦しくなり、進学が厳しくなるといった影響が推測されますが、母子家庭・父子家庭では、収入が一般世帯と同水準であっても、同じ問題が起こりやすいことが分かっています。その要因を探るのが、現在の研究テーマです。

研究では、仮説を立てた上で大勢

の人を対象にした統計調査をし、集めた膨大なデータを分析して、仮説の検証をします。その際、統計学が必須となるのですが、私は高校時代、数学が非常に苦手でした。研究を始めたばかりの頃は苦手意識でいっぱいでしたが、研究のために学ぶうちに受け入れられるようになり、今では面白いとさえ思うようになりました。高校時代は「これが何の役に立つのだろうか」と、いわば「数学のための数学」という思いで勉強していました。統計学は自分の主張の根拠を客観的に示すツールとして、今は欠かせないものとなっています。ツールとしての数学の有用性を実感できたことが、私を数学嫌いから解

き放ってくれたのだと思います。

また、時折、仮説と異なる結果が出ることもあります。しかし、それは失敗ではなく、直感に反する新事実が明らかになることにもつながる、研究の醍醐味でもあるのです。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 私自身がそうでしたが、高校時代にやりたいことが決まっていなくても、慌てる必要はないと思います。大学に入ると幅広い分野の授業を受けられるため、徐々に将来の道が見えてくるでしょう。ただし、そのためには、文系・理系にかかわらず、高校ではどの授業もきちんと受け、自分の可能性を狭めないことが大事だと思います。

私の高校時代

研究に役立っている 苦手だった英語

●高校時代は、部活動のバスケットボールに熱中しました。中学時代に始めて6年間続け、途中で諦めずにこつこつ頑張る姿勢が身に付きました。これは地道で根気強い研究が求められる今に生きています。また、部長を務めたことで、小さな組織であっても人をまとめる難しさを経験できました。

もう1つ、今、高校時代に頑張っておいてよかったと思うのは、英語の勉強です。私は中高一貫校に通っていたので、6年間、同じ英語の先生から学びました。その先生はとても厳しく、当時は英語の授業が嫌でたまりませんでした。叱られたくない一心から一生懸命勉強しました。研究者となった今、毎日のように英語の論文を読むようになり、高校時代に身に付けた英語が役立っています。

高校時代に学んだ知識は後々役立つので、どの科目も一生懸命取り組んでほしいと思います。